

内藤湖南と東方文化聯盟

— 昭和初期におけるアジア主義の一形態 —

陶 徳 民*

1931（昭和6）年12月10日、アジア諸民族の相互理解と共存共栄を図ることを目指す国際親善団体、東方文化聯盟の発会式が大阪で挙行された。満洲事変の約3ヶ月後、犬養毅内閣成立の三日前のことであった。発会式において、「文明の母 亜細亜」と題するインド独立運動の志士ラス・ビハリ・ボース（1886-1845、Rash Bihari Bose）の講演¹⁾と「東方文化聯盟に関する鄙見」と題する当該聯盟の理事である内藤湖南（1866-1934）の講演が行われた。

湖南の講演は昭和初期のアジア主義の一形態として重要な意味をもっていた。この点について、筆者が近著の終章「近代への執着と反省」において触れたことがある²⁾。ここでは、湖南のアジア主義思想を解明するための予備作業として、まず東方文化聯盟の成立事情と湖南との関係を検討したいと思う。なぜならば、1935年5月25日、すなわち湖南逝去一年未滿の時に同聯盟が主催した「故内藤湖南先生追悼会」で、聯盟の創始者で理事でもある清水銀蔵が、東方文化聯盟への尽力は晩年の湖南の一大事業でその生涯の様々な取り組みの総決算であったとして、次のように論じている。

* 関西大学文学部教授 関西大学ICIS拠点リーダー

1) 1915年来日、孫文と頭山満と知り合ひ、中村屋の主人、相馬夫妻の長女と結婚。太平洋戦争中、インド独立連盟総裁に就任、また日本政府の求めに応じてインド国民軍の創設に尽力。

ボースは発会式講演で次のように痛烈に西洋による東洋侵略を批判している。「印度及び支那の文明は其地の天然の産物である。もつとも支那は佛教を得て自己特有の文化中に同化したと云はれるかもしれないが、彼等は他人の文明の墓の上に、彼等自身を打ち建てようとはしなかつた、従つて彼等は何等侵略掠奪主義なくして成長した。彼等は多くの文明の生地を外部より傍觀した。而して時の侵略に首尾よく堪へおほせた。彼等は年を経た叡智を以て自己を精練した。従つて彼等は修整を求め破壊を求めなかつた。回々教が起つて支那及び印度を侵した。支那はそれに對し修整を見出した。印度も殆んどそれを見出した。今や西洋は東洋にあつて、これら三つ印度、支那及び回々教のすべてに對し、大に誤解を醸しつゝある。」「西洋文明は、これら三つの東洋文明に修整され得るか。欲すれば恐らく、可能であらう。併し西洋は破壊的に侵略的である。回々教とは、印度や支那は文化の親交を持つてゐるが、西洋とは如何にすべきか殆んど困果してゐる。西洋が打たてることを欲するものは親交でなくして優越である。修整を欲するに非ずして押付けである。それは彼等にとっては存在の漸次消滅を意味する。」「『東方文化聯盟会報』第1号、昭和7年12月、12-13頁。なお、同連盟の機関誌名は第1号と第2号は「会報」と、第3号以降は「会誌」となっている。

2) 陶徳民『明治の漢学者と中国—安繹・天囚・湖南の外交論策』（関西大学出版部、2007年）、271-274頁。

先生は申迄もなく明治大正昭和の時代を通じての碩學鴻儒であらせられたのでありますから、その學者としての御本分に對する御事業のみならず、新聞記者としての先生の御事業、學者新聞記者であるのみならず、先生は經世家としての東洋問題或は滿洲問題に關しましても非常な御盡力をして下された方ではありますが、私は思ひますのに、この内藤先生の學者であり、新聞記者であり、經世家であるこの一切の仕事を綜合したものが、先生晩年における東方文化聯盟ではなからうかと思ふのであります。東方文化聯盟の仕事は、蓋し學者所謂文化に關係ある以上學者、さうして、評論新聞、さうして經世的の識見をもたなければ出来ない仕事であります。この三者を綜合して先生晩年に於けるこの事業として現はれたのではなからうかと私はかう考へるのであります³⁾。

そして、清水はこの追悼会が開催される半年前に書かれた「内藤湖南翁を憶ふ」という回顧談において、1933年滿洲国を訪問した湖南が、日滿文化協會と東方文化連盟との連携への期待を直に鄭孝胥國務総理と西山文教部総務司長に伝えたことにも触れ、「東方文化聯盟は、先生の最後に關係せられたる事業で未だ其陣容も整はざるに、先生は、夙く世を去られたのであるが、先生の期待されたる如き使命を果す迄の、成果を得るに至れば、蓋し最後の事業で、又最大の意義を發揮する事業となるのである。自分等は此意味に於て、先生の志をなす爲めに、渾身の努力を拂ひたいと念ふて居るのである。聊か既往を追記して、先生追悼の意を致す事とする」と記している⁴⁾。

このように、聯盟の事業に対する湖南のコミットは晩年の湖南の思想を解明する上で極めて重要な手がかりを与えてくれるはずである。にもかかわらず、これまで東方文化聯盟に関する研究が殆んどなく、湖南と聯盟との關係についても伝記作家、青江舜二郎によるごく簡単な言及しかなかったようである。したがって、本稿では、昭和初期の対外關係史研究の一つの盲点ともいえる東方文化聯盟の成立事情およびその湖南との關係を明らかにしたいと考える。

1 聯盟結成の動機づけ

東方文化聯盟の生みの親である清水銀藏(1879-1937)が滋賀県野州郡の人、東京専門学校(早稲田大学の前身)を卒業し、愛国生命保險会社の重役を務めた。衆議院議員当選4回、地方分権を主張し、知事の公選を訴えた。立憲国民党の幹事、政友会の顧問もつとめたが、「終始木堂先生の幕下に属す」という⁵⁾。清水の号、千里は、犬養毅(1855-1932、号は木堂)がつけたものであり、『木堂書簡集』に収録している数々の書簡からも両者の間の並々ならぬ信頼関係

3) 「故内藤湖南先生追悼会」における清水銀藏の発言、『東方文化聯盟会誌』第6号、昭和10年7月、55頁。

4) 『東方文化聯盟会誌』第5号、昭和9年12月、100頁。

5) 鷲尾義直編『犬養木堂書簡集』復刻版(岡山県郷土文化財団、1992年)、175頁。

を窺うことができる⁶⁾。

では、東方文化聯盟はどのような経緯で結成されたのだろうか。

青江舜二郎によれば、同聯盟は満洲事変後「軍部の行きすぎ」を牽制しようとした外務省の意思を受けて結成されたそうであるが⁷⁾、それは一種の推測に過ぎなかった。というのは、理事10名、発起人約70名を擁する聯盟が、満洲事変（1931年9月18日）後の約3ヶ月という短い期間中に意思疎通と合意形成を経て組織されたということはとても考えられないし、「国民外交」を目指す連盟自体も決して政府の意思で作られた「官製団体」ではなかったからである。

清水の証言によれば、1931年12月10日の聯盟結成は実に一年半以上の準備時間がかかり、その動機づけに犬養毅と萱野長知（1873-1947）から受けた影響が決定的意味をもっていたという。すなわち1929（昭和4）年春、犬養に随行し孫文の移柩祭に参列した際に得たアジア連帯に関する「一大啓発」は、それ以降の清水の思想と言動をずっと左右していたようである。

昭和四年五月二十三日、木堂先生に随つて、孫中山の移柩祭参列の爲め上海に上陸せし日、上海市長張群によりて開かれたる歓迎會の席上、木堂先生の挨拶中、孫中山と自分は東亞の大局に付て共同の目的を有し、共通の境遇にあつた爲め自然深き交りを訂し、互に力になりあつた云々の辭があつたが、自分は先生の此の東亞の大局に于し共同の目的を有しとの言に接して、深く刺激された、共同の目的とは、云はずも知れた、亞細亞の解放、亞細亞の恢復である事は勿論である、共通の境遇とは、彼は清朝の専制下にあると、我は閩族官僚政治の下にあるの意に外ならぬと直覺した時の自分は、先生四十年の政治生涯を支配したものは、又此の一語に盡きたと感じた時、自分は此の支那旅行隨行の効果を此の一辭に接したる事に収め得らるゝと感じたのである。

日支兩國は東亞の大局に于して共同の目的を有つ事を意識し理解して、茲に真個の日支親善を見る事が出来るのである、而かも豈に啻に日支兩國のみと云はず、印度も暹羅も安南も比律賓もアフガニスタン、ペルシャ、トルコ、アラビアも全部亞細亞に国をするものは、共通の目的を有つ事に想到すれば、日本の使命が眞に重大であることを痛感する、先生に隨行した事によりて、一大啓発の機会を與へられ、爾来自分の脳裡を往来して止まなかつたのは実に此の問題である⁸⁾。

6) 同注5、「援兵十分ニ御願致候」、「敗戦の原因」、「貧乏世帯の気楽さ」、「黙して形勢を見る」、「別号千里ノ典拠」、「無論例の虚構也」（175-177頁）、「教育の根本は信」（289頁）、「参謀総長の功勞感謝」（316頁）、「支那巡回にあらず」、「同行してもよし」（514-515頁）、「政務調査が第一」（564-565頁）などの犬養による清水宛書簡。

7) 青江舜二郎『アジアびと・内藤湖南』（時事通信社、1971年）、409頁。青江舜二郎『竜の星座——内藤湖南のアジア的生涯——』（中央公論社、1980年）、315頁。

8) 清水銀蔵「東方文化聯盟設立に至るまでの経過」、『東方文化聯盟会報』第1号、昭和7年12月、1-2頁。）このようなアジアとの連帯感、吉野作造や青木正児などの知識人にも見られる。陶徳民「五四文

そして、翌1930（昭和5）年5月17日に萱野翁と歓談を行い、「時偶々印度関税一割引上げにより、経済界に衝動を起した時であったが、阪神の経済界は此の引上げに対し、かなり猛烈な運動を起したのにも拘らず、而かも其時印度国民会議のガンヂー氏が捕縛されたのに付ては、経済界に何等の感受も影響もなく、風馬牛関せざるものの如くであった」。「殊に阪神両市の如き毎年数億の通商取引を持続してみながら、商取引以外は無理解無交渉であることは寧ろ不思議の沙汰で、理解融和の根本基礎の上に立つ通商貿易でなければ、其取引に障害や停頓を来すことは過去に於て枚挙に暇がない程の實例がある。此の通商貿易の伸張上の立場から見ただけでも大阪の地に東方諸国の融和親善を図る一機関を設立するも亦妙ならずやとの談話が生まれ」、「決意した次第である」⁹⁾。

孫文の移柩祭、ガンヂーの捕縛といった国際的事件や事情に対する先輩の政治家と東亜志士の反応から大いに鼓舞された清水は、機を逸さずに、萱野との歓談の三日後に速やかに聯盟という「実体機関」の結成に動き出したのであった。

さて、ここにおいて、東方文化聯盟が昭和初期の大阪で生まれた経済背景に一筆触れる必要がある。

元来、外務省の対外文化事業が1937年の日中戦争勃発まで基本的にはいわゆる「対支文化事業」であり、インドなどは視野に入れていなかった¹⁰⁾。では、なぜ東京の役人よりも関西の民間人が先にインドなどへの文化事業の必要性に着目したのだろうか。

1920年代前半にアメリカと中国が日本の輸出総額の約60%を占めていたが、両国との関係悪化などで輸出額が逡減したため、幣原喜重郎外相による「経済外交」で輸出先の多角化、すなわちインド・南洋方面および近東・エジプト方面への市場開拓が図られるようになった¹¹⁾。新市場の開拓をめぐる1930年代初期の大阪商人の意気込みは、聯盟の主幹である戸田芳助の文章から十分に窺えるのである。

学革命に対する日本知識人の共鳴——吉野作造・青木正児の中国観と日本事情——」『文化事象としての中国』（関西大学出版部、2002年3月）所収。

9) 同注8、2頁。

10) 三谷隆信（外務省文化事業部長）「外務省文化事業に就て」（『東方文化聯盟会誌』第5号、昭和15年8月、38-49頁。）

なお、三谷が義和団賠償金を対支文化事業に使うことで「支那側と相談」したことは「大正十年頃」だとしていた。とすれば、その前年の1919年に湖南が「支那に於ける外人の教育施設」において日本政府に、アメリカの対華文化事業に習い、義和団賠償金でもって「支那に於て教育上の施設をするといふことは、殆ど一日も猶豫すべからざることになって居る」と訴えていたことは、ある程度奏功したかもしれない。同注2、拙著『明治の漢学者と中国—安繹・天囚・湖南の外交論策』、256-258頁。なお、アジアにおける教育文化事業をめぐる日米の競争について、山室信一『思想課題としてのアジア』510-570頁（岩波書店、2001年）参照されたい。

11) 佐古丞「大正期経済外交の視点—国家像の再構築」（関静雄編『大正再考—希望と不安の時代』所収、ミネルバァ書房、2007年）を参照。

特に吾等は亞細亞貿易の中樞を爲してゐる大阪の上下にその實現を極力慫慂する、正義の爲めの商戦を開始し、東部地中海以東を大阪商人によつて占領し、全白人をしてその商利を失はしむることは、まったく利益の爲めに唱へるのではない、大阪商人の正義觀の満足のために提言するのである。

即ち我東方文化聯盟がその本據を大阪に擇んだのは、此の意味である、吾等は多年机上の文化論にもう飽き々々してしまつた、効果的な研究の實現は、實際上の國交とその通商より初めなければならぬ、東京に於て斯うした事業は空虚な理論的検討に終始するか、或は政治的悪用の具に供せらるゝ惧れがある。しかし大阪はその通商貿易に於て關東の茶と生糸の農藝品の一部であつたに反し、重輕工業品の大半以上を輸出入してゐる、國際經濟の王座を占有するものである¹²⁾。

そして、対印度貿易の見通しについて、前カルカッタ総領事酒匂秀一が次のように樂觀視している。

印度は大英帝国の諸領中最も輝かしい宝石と云はれたのであります。最近の貿易統計を見ますと、一九三一年度に比して一九三二年の我對外輸出の増加率は全般に於て二割四分であります¹³⁾が、対印輸出の増加率は七割四分の多きに達しております、即ち日本にとりましても、今や印度は最も輝かしき宝石の一つに成りつつあるが如くであります¹³⁾。

東方文化聯盟はまさにこのような背景のもとで、徐々に大阪の財界人・經濟人の幅広い支持を集め、アジア貿易拡大のための文化事業を展開させていったのであった。

2 聯盟の創始と事業展開への湖南の関与

事実、東方文化聯盟の結成は、清水の予想よりかなり多くの困難に遭遇した。

最初、清水は大阪で多大な影響を有する俳人・新聞記者であり、政治家でもある相島虚吼(1867-1935)¹⁴⁾を中心に聯盟を作ろうとした。相島は衆議院議員に当選2回、憲政擁護・閩族

12) 戸田芳助「我觀東方文化聯盟」、『東方文化聯盟會報』第1号、昭和7年12月、86頁。そして、聯盟と同じく1931年にできた大阪帝国大学も實際、大阪民間の陳情運動と出資によって創設されたということと考え合わせると、江戸時代以降、「天下の台所」となっていた大阪の財界・經濟界の力がいかに強かったかが一目瞭然である。

13) 酒匂秀一「変わり行く印度」、『東方文化聯盟會報』第2号、昭和8年6月、9頁。

14) 茨城県小田村の人、名は勘次郎。大阪毎日新聞社で編集主任・副主幹・顧問等を歴任後、『昭和日日新聞』を創刊し、主宰となる。一方で正岡子規・高浜虚子に師事、大阪満月会を興し、盛んに新聞に投句。句集に『虚吼句集』など。

打破に尽力し、女性の投票権行使さえ提言し、その政治的立場は犬養と清水のそれに相当近かったからであった。しかし、「相島翁の病氣益々其度を加えへ、到底此れが任に不堪、商工会議所高柳、紡績聯合の阿部、日本綿花の喜多等の諸氏に相談せしも、此が中心となる事を肯ぜず、如何せんと徒らに日を遷延せる中に遂に秋に至れり」¹⁵⁾。

商工界の有力者が誰も聯盟の運営責任を引き受けようとしなかったため、清水は転じて鹿児島出身の大阪名士で医学博士である佐多愛彦（1871-1950）の協力を求め、幸いに後者の承諾を得ることができた。東京帝国大学で病理学を学んだ佐多は、大阪府立高等医学校の校長として昇格運動を主導し、1919年に同校をはじめの公立大学である大阪医科大学に昇格させることに成功し、後の大阪帝国大学医学部の礎石を築いた。1920年代の初めに、また日独協会を設立し、その会長を務めた。

おそらく犬養のアドバイスも得ていたためだろうと思われるが、清水は最初から湖南を聯盟の精神的指導者として仰いでいた。そのため、彼はしばしば京都府相楽郡瓶原村の恭仁山荘に足を運び、隠棲中の湖南に「三顧の礼」を尽くし、次のようにその支持と助言を求めた。

〔昭和五年〕

五月二十五日 此問題に関して内藤湖南翁を説くする必要ありとし、翁の近況をきく為に大毎京都支局に岩井（武俊）君を訪問す¹⁶⁾。

五月二十八日朝、相島（虚吼）翁と相携へて京都府相楽郡瓶原村の山荘に湖南翁を訪ね、此問題に關し意見をもちむ。

世界最高にして最古の文化を有する印度を淺薄なる文化國たる英國が支配せる杯、之れ位ひ不合理なる事あるべきにあらず、早晚世界の此不合理は、合理に復するが當然である、印度さへ獨立せば、他は風をのぞみて解決し得らるべし、斯くて初めて日支の問題も眞面目に解決を得られん、よろしく大にやるべし、出來得る丈の援助を惜まず。

これ先生の辭なり、我等の決意は此鞭撻によりて更らに固きものあり。

六月四日 殷汝耕氏を訪ね、此問題に於し意見を徴し同意をもとめ、神戸の楊寿彭氏と相談する事をすすめる、次で印度革命の士ボース氏を穩田を訪ね、神戸のサハイ氏に紹介せらる。

六月八日 瓶原の山荘に再び湖南翁を訪ひ、數日前車中草案せし主意書の訂正を依頼

15) 同注8、4頁。

16) 岩井武俊は大阪毎日新聞社京都支局に勤め、有馬温泉に療養中の湖南の口述を筆記し、『新支那論』（1924年）の纏めに尽力した有能な記者であった。

す、（其主意書左の如し）。

支那は方に統一に傾倒して日も足らざる活動をして居る。印度の獨立の要求、洵に涙ぐましき切實なるものがある。顧れば日露の大戦を轉機として東亞の自覺を喚起し、正に光復の時代に入らんとする極めて大切な時に進みつゝある、而も光復の大事は東亞生民十億の固き結束を見ねば出来るものでない。

今や東方に生存する各國民が民族的に互に理解し合ふて、東亞大局の共同目的に邁進する事が最大急務である、而して亞細亞民族相互の理解と其親和を計るべきが本會の目的である。斯くて或等の希ふ處は人種平等權を確立して經濟上共存共榮の實を挙げ、人類全般の眞の向上と幸福にあるは勿論である。

十月二十七日 神戸に印度人サハイ氏及び民国人楊壽彭氏を訪ね、此企てに付て謀る所あり。

〔昭和六年〕

一月五日 湖南翁を瓶原の山莊に訪ね、佐多〔愛彦〕博士との話し合ひ〔亞米利加は南北を聯繫し、正に歐州經濟聯盟の提唱せらるるあり、宜しく東亞の聯盟を策すべし〕を談り同意を求め、兩博士と自分の三人提唱者となりて、京阪に人を集むる事に定め、二月中旬第一回會合を催すべしとす。

四月一日 東洋問題の會合に関する案内状を發送す。凡そ二百枚。

「東洋問題は帝國存立に関する重大なるものにして、殊に經濟上に立脚して一層切實なるもの有之候、而も現状に顧みて如何の狀態に相成居るか、對支關係對印關係は更なり、其間露國の進出、亞米利加の策動等觀じ来れば、正に帝國の大計を樹つべく、國民の覺悟をなすべきの秋と存じ候。

就ては之等に関し種々ご懇談を願度候間、来る四月八日午後三時大阪俱樂部に御來會を得ば、仕合せに候（内藤・佐多・清水）

四月八日 東洋問題に関する懇談會を午後三時大阪俱樂部に開く。

（出席者は邦人25名、インド人3名）

本日病氣の爲め内藤翁の俄かに出席を見合されしは遺憾なりき。當日内藤翁の寄せられたる電報左の如し、

「東亞に於て共通の文化若くは種族を有し同一の過去の境遇と將來の運命を有する各地諸君と會合すべき會に病氣缺席せる事を遺憾とし、今後協力を深く希望す、内藤」

五月十日 湖南翁を瓶ノ原の山莊に訪ね四月八日の第一回會合に付て報告し、會の命名を依頼し次回の日取等相談す。

六月二十二日 第二回懇談会を午後三時大阪俱樂部に開く。(中略) 湖南翁の提唱せし東方文化聯盟の名に於て会を設立する事に相談一決。(中略) 次で内藤翁の感想談あり、ボース君の印度独立運動に付ての談あり、最後に鹿子木博士の感想談ありて、佐多氏によりて閉会は宣せられたり。

十二月十日 正午大阪俱樂部に發會式を挙ぐ。

佐多博士開會の挨拶をなし、清水銀藏氏經過の報告をなし、規約の承認を求め、役員の推薦に付ては内藤、佐多、清水一任に決して、議事を終り、午餐を共にし、茲に東方文化聯盟生る。

一時半講演に入り、ボース氏の亞細亞精神の意識、内藤博士のボースの講演に對する感想等あり、佐多氏の閉會の辭を以て發會式終了¹⁷⁾。

以上で明らかなように、湖南は聯盟の名づけ親であるだけでなく、聯盟の初代理事10人の一人でもあり、その添削を経た清水の主意書は公式な「東方文化聯盟設立の趣旨」となって毎号のように会誌の扉を飾ることになった。そして、特に注目すべきは、「過去の境遇と將來の運命」を共有するアジア諸民族の連帯に對する湖南の強調と、イギリスのインド支配という最大の問題さえ解決できれば日中関係なども調整されやすくなるだろうという湖南の展望である。この意味では、晩年の湖南は体調不良のために聯盟運営の実務に関わることが少なかったにもかかわらず、連盟の精神的指導者となっていたことが確かなことであつたらう¹⁸⁾。

そして、ここで注意に要するのは、發會式における湖南の講演は「ボースの講演に對する感

17) 同注8、3-10頁。

18) 清水は、「内藤湖南翁を憶ふ」において聯盟結成における湖南のキーパーソンとしての役割を次のように紹介している。「先生は東方文化聯盟創立に關する其主唱者の一人であるのみならず、「東方文化聯盟」の名は實に先生によりて命ぜられたのである。自分が大阪を中心として、此主の會合を思ひ付いて、相島君と、南山城の山莊を訪ふたのは、實に昭和五年五月二十八日であつた。自分等の發意に對し、いたく賛成せられ、非常に勢ひ込んで、「それは是非やろう、東洋問題は、支那丈けでないで、印度は勿論、全東洋に眼をむけねばならぬ殊に文化の低い英國杯が、世界最高の文化を有する印度を支配する事が不合理至極の事で、やろう、是非大にやろう」と非常に乗り氣になつて、鞭撻せられたもので、自分等は之で、大に力を得て、其決意を鞏固にした次第である。越へて六月八日に自分は再度訪問して、其趣旨書を示して、先生の加筆訂正を依頼したが、直に筆をとつて、字句の一二を更められたが、之が現在用ひられて居る設立の趣旨書である。支那側や、印度側への關係も付けねばならず如何なる形で、如何なる方法で、世に之を發表するかは相當面倒な問題であつたから、之等には、各方面との接觸を試みたが、漸く成案を得る事が出来たので、昭和六年一月五日、及三月七日の二回山莊を訪問して、愈々四月八日に先生と佐多博士と自分の名によりて、大阪俱樂部に人を集めて見たのである。」(同注4、99頁。)

想」の形で行われたということである。上記の準備過程で見られるように、清水は日本における中国人（殷汝耕と楊寿彭）とインド人（ボースとサハイ）の活動家たちに等しく働きかけ、聯盟の趣旨への賛同と聯盟の事業への参加を要請したのであった。とすれば、本来ならば、発会式における中国人活動家の講演も当然予定されていたはずであった。それは実現できなかったのは、いうまでもなく、満洲事変後に悪化した日中関係の影響によるものであったろう。

当時の緊迫した内外情勢について、清水は次のように追想したことがある。

當聯盟の生まれた當時は、丁度満洲事變の直後で、隣國支那との間柄は云ふ迄もなき事で、之が爲めに國際聯盟との關係は險惡に陥り、國際關係極めて急を告げて居つた上に、金解禁と消極政策の結果は、國民經濟の窮乏を來し、國民生活は疲弊困憊の極に達し、目もあてられぬ慘状を呈し、内外物情騒然たる時であつた。斯る内外の危局を呈して居る上に、更らに憂ふべき重大事のおそれ杯を見んとして、旁々若槻内閣は、絶對多數を擁しながら、六十議會を前にして、遂に仆れるの止むなきに至つたが、それが當聯盟の生まれし翌日、即ち十二月十一日である。東方文化聯盟は斯る重大時期に生まれたのである。其翌日犬養内閣成立して、金輸出再禁止を斷行して、當面の經濟界を一時救濟するの策を採ると共に、満洲問題の善後策を講ぜんとせる矢先き、上海事件の勃發を見、之もどうにか収拾して、愈々内外の危局に對する根本的對策を講じて、東洋平和確立の基礎を造らんとせる時、偶ま五・一五事件の不祥事に會して、仆れるの止むなきに至つたのは、千載の恨事とせねばならぬ¹⁹⁾。

すなわち清水の抱懐したアジア諸民族の相互理解と共存共栄という夢に反して、時勢がますます悪化の一途を辿り、結局、良師益友であり総理の座に輝いた犬養さえもクーデターを起した将校の凶弾に倒れた。清水の落胆と無念が想像できよう²⁰⁾。

にもかかわらず、清水・佐多・湖南などは不退転の決意でもって、様々な困難を乗り越え、聯盟の事業を推進させたのであった。1934年6月に湖南は逝去し、1937年清水自身も他界したが、その前年の1936年12月に開催された創立五週年記念祝賀会で、清水は次のような活動実績を列挙していた。

19) 清水銀蔵「創立五週年を迎ふるに當りて」、『東方文化聯盟会誌』第9号、昭和12年1月、3-4頁。

20) 「東亜の大局に對する經綸、日支の眞の融和親善を基調としての亞細亞の奪回は木堂の晩年に殘された最大事業であつた事は、勿論政黨政派を超越して木堂を好むと好まざるとの好悪を無視した萬人の期待であつた、木堂と深交默契して一大經綸を行はんとした孫中山は先きに死し今又木堂を喪ふ。嗚呼亞細亞の大計を誤まるものは支那の軍閥者流のみでないのである、而かも列強よりは暗殺團と目され侵略者と云ふ誤念を數層強化して又拂拭し難くならしめた。」戸田芳助「我觀東方文化聯盟」、『東方文化聯盟会報』第1号、昭和7年12月、68-69頁。

一、會誌

東方文化聯盟會誌八冊、昭和七年十二月十日初刊、同十一年7月迄。

一、會合數四十四回

昭和六年十二月十日發會式を擧げてから、今日迄の會合數で、十一年四月に初めし毎月十日の自由座談會六回分を含む。

一、招請せし國別人員

中華民國人三十六名（内學生二十名）、印度人十人、蘇國人五名、滿洲國人四名、暹羅國人一名。

其他支那、滿洲、印度等に對する國際的大小各種會合等京阪神に亘りて或は主催し、或は參加せしもの三十數回、内二十數回は印度關係にして、十數回は支那、滿洲關係也。

一、印度學生其他の斡旋

印度學生及工場研究者の來朝者を斡旋せしもの十五六名、其他對支、對印個人的關係にて事故紛議等發生の場合之等を調停斡旋せし事多し。

一、日印通商條約廢棄問題

昭和八年四月本問題通告をうけし當時は、直に理事會を開き、決議文を聲明書として發表し、之を會員に頒布し朝日會館に於て、講演會を開きて、輿論を指導せり。

之より先き昭和七年秋冬に亘り、遣印親善使節派遣方を唱へて、當局に迫りしも、時機を逸し、遂に通商條約廢棄の事を見しは遺憾に堪へず。

一、印度震災義捐金勸請

昭和九年春の印度震災に對し、日本商工會議所、日印協會、佛教聯合會と協力して、義捐金募集に力めたり。

一、海外視察

昭和九年二月大連にて開催のアジア民族大會準備會にサハイ氏と戸田芳助氏を派遣せり、終りて奉天新京等を視察して歸れり。

昭和九年九月下旬より自分は、東方文化聯盟の存在を認識せしめんが爲めに、滿洲各地を経て、北平、天津、青島、上海等に遊び、各地要人並に名士と會見意見の交換を行ひて月餘にして歸國せり。

一、會員數

現在八百七十五名、其他會友約二百餘名²¹⁾。

このように数々の活動実績を挙げているが、世間の評判はまちまちで、新聞雑誌の時評に「飛んでもない誤解もある様」であった。このために、清水は時に會誌の紙面を借りて聯盟の

21) 同注19、5-6頁。なお、會員數は1940年に「一千有余名」になった(會誌第17号、昭和15年8月、59頁)。

使命に関する説明をしなければならなかった。その一例として、己のアジア主義の真意と独自性に関する次のような弁解が行われていた。

曾て何かの雑誌で、東方文化聯盟の志す所、所謂大亞細亞主義者の唱ふるものや、軍部一部のイデオロギーや外務次官等の有する亞細亞論等と同じものである様に書かれてあつたが、自分は所謂軍部一部のイデオロギーなるものを熟知知らないと共に、大亞細亞主義者の唱ふる所や、重光氏の抱懐せる意見杯一切承つた事がないから、同じであるやら、特異なるものであるやら分らないが、もし同じ亞細亞主義に立つと云ひ條、亞細亞に號令する意味を以ての、所謂亞細亞の盟主を以て任じたり、問題を我れの優越なる力にのみよりて解決せんとするにありとせば、我等の主張と根本に於て相違があるのである。

我等が東方諸民族の理解と、親善を計り、以て其結盟をなさんとする所以のものは、一人種の平等權を確立して、經濟上の共存共榮の實を擧げて、人類全般の平和と幸福に庶幾すると共に、帝國の存立を確保して、之によりて吾が人口問題を解決せんとするに外ならぬのである²²⁾。

3 湖南におけるアジア主義思想の到達点

考えてみれば、上記の清水の弁明は、確かに湖南の添削を経て会誌の扉を飾るようになった東方文化聯盟の趣旨に対する忠実な解釈である。しかし、聯盟趣旨への助言を惜しまなかつた湖南は、もともと複眼的思考に長じる歴史家であり、そのアジア主義思想の射程は早くも人種平等、共存共榮という実践的な目標を遙かに超え、西洋発の近代の本質を文化論・文明論の次元で鋭く批判することを目指したのであつた。

これについて、冒頭に触れた「故内藤湖南先生追悼会」において、湖南の長男、乾吉氏が次のような意味深な証言を残している。

（父が）歐洲に旅行を致しました時に、私もその時一緒について廻りましたんですが、その時にヨーロッパを廻つて來ましてから、特に東洋の文化といふものに對して餘計に、つまり、西洋の文化との比較の上に於て餘計に東洋の文化が優れて居るといふことをひどく感じたと思ひます、向ふに行つて居ります間にも始終さういふやうな話を聞かされました、私もこの西洋に行つて初めて東洋文化といふものが如何に價值のあるものであるかといふことを知つたといふやうな次第で御座いますが、さういふ譯で、歸りましてからでも、話があつたものですから、西洋の文明のことについて毎日新聞にも書いたと思ひます

22) 清水銀蔵「東方文化連盟の使命に付て」、『東方文化連盟会誌』第7号、1935年1月、48頁。

が、さういふことを考へ合せて見ますと、東洋文化といふものに對して非常な熱情を有つて居つた、さういふことの爲につまり特別の考を有つて居つたといふことが文化聯盟との關係といふことによつて、これによつて一層完成しました²³⁾。

ここにいう欧州旅行は、すなわち1924（大正13）年から翌年にかけて行われたものである。乾吉によれば、渡欧で改められた西洋文明と文化への認識は、「民族の文化と文明とに就て」という1926年1月大阪毎日新聞に連載された論説に結実したが、その認識が行動に移され、社会実践のなかで「一層完成」を見たということは、正に聯盟へのコミットによって表されているそうである。

では、「民族の文化と文明とに就て」と題する論説はどのような内容を有するのだろうか。

「欧米文明の礼讃に反対す」、「文化の意義」、「民族文化の程度」、「文化程度を測る尺度」および「東西の文化生活」という5節からなる同論説の主なポイントは次の通りである。

(1) 「国民とか民族とかいうものが世界に存在する目的は、単に富を作るにある」のではなく、「世界の人類を向上せしむべき文化を作るにある」のである。

(2) 民族の文化とは「国の富とか強大とか、経済組織、工業の進歩、国民生活の進歩とかいうこと」ではなく、その民族が五百年ないし千年単位の長期間にわたって形成した「特別な教養」と品格である。

(3) 「近世文明では工業の進歩を以て国民の程度の標準とする傾きがあるけれども、その見方は決して正しくない。多量生産を主とする工業は常に人類の個性を滅却する傾きが多いので、人類の真の進歩の主意には適わない。最後には必ず個性の要求を満たす工業が起らなければならないのであり、その中間の工業として工芸があり、最後には工芸の手工化を来さなければならない。」

(4) 「天然を征服するということが決して真の文化ではない。民族生活の極度のものではない。その上に天然を醇化……即ち天然を保護し育成して天然の中に安んじ得る程度になるところのものが即ち真の文化生活であらねばならぬ。」²⁴⁾

そして、同論説の結論は次のようになっている。

要するに東洋殊に支那、日本等の文化生活というものは、原始生活から文明生活に入る過程は数千年前に通りこして、文明生活の利用厚生を主とする以上に、更に生活の趣味化芸術化を早くから考えておったのである。天然を征服する、即ち人工の極度に出来たもの

23) 「故内藤湖南先生追悼会」における内藤乾吉の発言、『東方文化聯盟会誌』第6号、昭和10年7月、68頁。

24) 内藤湖南「民族の文化と文明とに就て」、全集第8巻、141-147頁。当然のことではあるが、近代文明はいわゆる「地下資源文明」であり、前近代の「地上資源文明」とは地球環境へのインパクトという点で相当違うものである。

を利用することに満足せずに、更に天然を醇化するために天然の保護育成を努めることを考えて、人類が選択した最もよき天然と同化して生活するというを最後の目的としているのである。かくの如き文化は、その中間の過程である利用厚生を主とした文化生活を以て最も善いものと考えているヨーロッパ人、殊に米国人などの想像し及ばぬところである²⁵⁾。

文化発展の段階論から言えば、自然との共生を重んじる東洋の文化生活は自然の征服と利用を重んじる西洋の文化生活よりむしろ上位の段階にある。このような確固たる東西比較文化史の視点を持っていたこそ、湖南は聯盟結成に関する清水の打診を受けた際に、また趣旨添削の依頼を受けた際に、「世界最高にして最古の文化を有する印度を淺薄なる文化國たる英國が支配せる杯、之れ位ひ不合理なる事あるべきにあらず、早晚世界の此不合理は、合理に復するが當然である」という高論を堂々と展開することができただろう。

さて、「民族の文化と文明とに就て」（1926年1月）という論説と「東方文化聯盟に関する鄙見」（1931年12月）と比較した場合、一種の「近代超克」論とでもいえる湖南のアジア主義思想はどのような進化を遂げたのだろうか。

1926年1月から1931年12月までの6年間に起きた世界的事件は、いうまでもなく近代社会の危機と脆弱性を決定的に露呈させた1929年10月アメリカ発の大恐慌、および1931年9月の満洲事変であった。そして、湖南個人にとっては、1931年ラス・ビハリ・ボースを通じて深められたインド文化への理解とインド独立運動への共感も画期的体験であった。この二つの契機が次のように、湖南の英米文化批判、近代社会批判を一層先鋭化・政治化させたと考えられる。

第一に、「民族の文化と文明とに就て」で提示した「文化程度を測る尺度」を用いて、文明

25) 同注24、152頁。湖南のこの重要な論説の背景と本質に関して、谷川道雄氏は次のように解説している。「その見地に立てば、自然の征服によって成り立った欧米の近代文化は、むしろ未熟で粗野なるものと言わざるを得ない。一九二四（大正十三年）年から翌年にかけてヨーロッパ視察を試みた湖南は、実地見聞によってますますその確信を深めたようである。ただ彼は、ヨーロッパ文化のすべてを低く見ているわけではない。イタリアの古典文化の影響を受けた文化財には、熱い賛辞を送っている。その中国文化への高い評価は、決して偏狭固陋なアジア主義に出たものでなく、人類文化の発展という普遍的見地に根ざすものであった。」（谷川道雄「序説 三 湖南の思惟構造」、内藤湖南研究会編『内藤湖南の世界—アジア再生の思想』、河合文化教育研究所、2001年3月）

一方、葭森健介氏は次のように分析している。「この文章は1924年のヨーロッパ旅行の後に書かれており、実際に西洋の文明を目の当たりにして、西洋文明を無条件で礼賛することに警告を発したものである。（中略）福沢諭吉が西洋文明を手本として脱亜入欧を主張するのは正反対であって、湖南の歴史学は東洋独自に文明を発達させたという過程を解明するところから出発している。従って湖南は西洋文明から距離をおくのは当然かもしれない。そして、この文章に到り明治初期の文明論、文化論の考え方に対し決定的な批判を突きつけている。ある意味で湖南の文化史研究の到達点とも思われる。」（葭森健介「内藤湖南『文化』史について」、内藤湖南研究会編 特集「内藤湖南研究—学問・思想・人生—」所収、河合文化教育研究所『研究論集』第5集、2008年2月）

の装置に頼るイギリスのインド征服・支配の不条理を糾弾し、インド独立の必然性をその文化の先進性に対する確信をもって論証したこと。

私は嘗て英國に遊んだ時、倫敦市外のウエンブリーに於て、イギリスの全領土大博覧會を見たことがある、その時に非常に感じたのは、その中で印度の手藝品の非常に優れてゐることであつて、それは到底英國人の眞似の出来ぬ様な藝術的なものであることであつた。それは全く現代の生産品であるが、現代の印度といふものは、ボーズ君の言はるゝ如く英國の爲にその政治及び經濟上の自由發達を阻害せられ、貧弱の極に沈淪してゐる状態である。それにも拘らず、英國の政治上經濟上の壓迫を以ても如何ともし難いものを印度國民の指の先に持つてゐるといふことが明かにあらはれてゐる。例へばその工藝的彫刻品、織物等の如きそれであつて、私はその中にある種類の物を土産品として買ひ求めて、日本に歸つた後親友達に贈つたのであるが、イギリス全領土の生産品の中で、自分が親友達に贈り度いと思ふ様なものは、之を印度の工藝品、若くはやゝ下るけれども、ビルマの工藝品に求める外無かつたのである。倫敦には又ヴィクトリア・エンド・アルバート・ミュージアムといふのがあつて、主として古代印度藝術及び工藝品を蒐集し、又は其の模製品を陳列してあるが、其の文化の高度は到底英國本土で産み出されたものと比較にはならない程のものである。

自分は元來一つの意見を持つて居る、國民若くは民族の文化の程度を測る尺度としては、工藝品を最も適當なものと思つて居るのである。その國民々族の知識趣味で凡ゆるものが綜合して出来上つた結果は、即ちその知識趣味が生活化されるのにあるので、その生活化されたものが即ち工藝品である。工藝品の最もよいものを持つてゐる國民は、即ち最も文化の發達した國民といふべきものである。その點から考へると、英國は近代の科學と經濟組織とによつて、印度を政治的に壓迫し征服してゐるのであるけれども、その文化を征服し得ないことは明かであつて、文化を征服し得なければ眞の征服にはならぬので、如何なる機會があれば、必ずその政治的經濟的壓力を失ふといふことは之を斷言することが出来るのである。ボース君がその熱烈な愛郷心を以て印度の獨立を唱へ、それが印度に於て、多數の若き人々に同情者を有するといふことは尤もなことであつて、我々はボース君がいつかはその目的を達するであらうといふことを信ずるものである²⁶⁾。

第二に、行き詰つた近代の政治經濟組織の原理を疑問視し、活路を打開する処方箋をアジアの伝統文化から見出そうとしたこと。

「民族の文化と文明とに就て」における湖南の西洋批判には、まだ西洋のライバルとしての

26) 「東方文化聯盟に関する鄙見」、『東方文化聯盟會報』第2号、昭和8年6月、3-4頁。

批判の部分が含まれていた。言い換えれば、当時の湖南はまだ「英米対日本」という列強同士の立場から完全に抜け出すことができなかった。「日本はこれ（富強を誇る英・米）に比べると非常に不幸な位置にあるようで、天然の資源は乏しいし、植民地も大したものをもっていない。単に国際的貿易によって非常な困難の下に富を作って行かなければならない。けれども自分はこの日本の貧乏さを礼讃するのである。英国が今日富強の点において歐洲に比ぶるものがないにもかかわらず、仮にもし英国が滅亡したとしたならば、果して英国が世界の文化に何程の貢献をなしたか、何物を残したかということになれば、甚だしい疑問とせなければならぬ。況んや米国の如きはいうに足らない」²⁷⁾ というのが、その端的な表現であった。

これに対して、「東方文化聯盟に関する鄙見」における西洋批判は、次のように近代西洋の政治経済組織のメカニズムだけでなく、その組織を模倣した日本の近代化路線の是非にも及んでいたのである。すなわち「最近の社会状態は、植民地に於ても段々行き詰まりを表はして来、資本と労働との階級闘争が段々盛になるに就いて、選挙によって造られる政治組織が果して最善のものであるかどうかは頗る疑はれる様になって来た。（中略）〔明治維新後の日本も〕六七十年間に欧米と同じ様な経過をすることになったので、その行き詰りから来る弊害もやはり同様に之を受けねばならぬ様になって来た。』²⁸⁾

では、このような行き詰りの状態から脱出する方策があるだろうか。湖南によれば、つぎのような古来の東洋の経験が参考になるだろうという。

(1) 古代印度の仏教僧団の「内部に於ては、最も平和にして競争心を起さない生活の方法を採り、外部に向つては、各々の持つ才力によって国王人民の信仰を得て、法を拓めることが出来た。かういふことは、選挙もしくは競争心を鼓舞する凡ゆる方法に拠らないでも、人間の進歩といふものは成し得るといふことを表してゐる」のである。

(2) 前近代の日本において氏神中心の村落組織に機能していたのは、「選挙若くは凡ゆる競争的方法によらない行政的仕方で、平和な自治を形作る上に於ては、この方法は今日でも相当に参考してよいもの」である。

(3) 奉天城外の清真寺の長老から知った「マホメット教徒の交通に対する一種の組織」である。すなわち満洲の回教徒は現代の汽船を使わず、各地の回教村落ネットワークに頼り、沿岸地方の木船を利用し、長い歳月をかけてメッカ巡礼を行っているということである。「現代の様に凡てが速力を尊ぶ組織である一面に、さういふ風な交通組織のあるといふこと、それは一面に於て又自分の信ずる宗教なり儀式なりを維持する方法にも関係があるので、現代の如く宗教も道徳も無視して功利的にのみ進まんとする時代に何物かを教へ得るもの」である²⁹⁾。

湖南によれば、「自分が極少ない経験によつても、東方諸国諸民族によつて教へられる所の

27) 同注24、141頁。

28) 同注26、5頁。

29) 同注26、6-7頁。

もの一、二を此の如く挙げる事が出来る。この外にも色々な生活の様式に関する事、風土民族に関する事に於て、更に教へらるべき事が多々あることと思ふから、東方文化聯盟といふものの無意義でないといふことは之によつても知ることが出来る。で我々がもし、この今始めて出来た微力なる文化聯盟が基礎となつて、現代の社会組織、経済組織に殆ど中毒してゐる、いわゆる強国の国民に最も痛切な反省を與へ得ることを期して、この聯盟の前途を祝するものである。それにつけてもビハリ・ボース君が印度の文化に就いて、我々に此の如き反省をなすべき機会を與へられたことを感謝する。」³⁰⁾

このように、昭和初期の湖南がすでに「現代の社会組織、経済組織に殆ど中毒してゐる、いわゆる強国の国民」が「宗教も道徳も無視して功利的にのみ進まんとする」傾向に警鐘を鳴らし、その傾向の是正に役立つと考えられるアジアの良き文化伝統を示してくれた。したがつて、湖南のアジア主義思想は一種の「近代超克」論といつても決して過言ではない。それは、戦間期のアジア主義思想の系譜にどのような位置づけを有したのだろうか。また、戦時下の「近代超克」論とどのような関連性をもっていたのだろうか。これらについては、今後の研究課題としたい。

30) 同注26、8頁。